

老人医療 NEWS

老人医療の実践者として 専門性と理想の追求を

老人の専門医療を考える会

会長 天本 宏



本会は、昭和五十九年十一月頃か
ら行われた、老人の専門医療に携わ
る医師数名による研究会に端を発し
ているものです。その後、徐々に活
動の輪が広がるとともに、会の設立
を望む声が高まり、昭和六十年五月
十五日、設立総会が開かれ「老人の
専門医療を考える会」が正式に発足
しました。

当会の目的は、会則第四条に記さ

れているように、「今後急速に進む
であろう高齢化社会の中で老人医療
の果す役割と専門性を考え、我国に
おける理想的な老人医療のあり方を
追求し、全ての老人が安心して、よ
り良い医療を受けられる環境を実現
させる事」に、会員がその力を結集
させようというものです。
この目的に基づき、「どうする老人
医療——これからの老人病院」とい

医療——これからの老人病院」とい

発行日 昭和61年7月8日
発行所 老人の専門医療を
考える会
〒160 東京都新宿区大久保1丁
目4番20号 三島屋ビル601
03 (232) 5926
発行者 天本 宏

うテーマで、昭和
六十年三月九日に、
第一回めの公開シ
ンポジウムを開催
約五〇〇名もの参
加者があり、マス
コミ等にも大きく
を幅広く展開してきました。
当会を中心としたこのような努力
は、少しづつではありますが確実に
評価されつつあり、老人病院に対す
るイメージも変わり、老人専門病院
の必要性も理解されつつあると思わ
れます。

取り上げられ、予想以上の反響を得
ることができました。また、同年六
月二十九日には「老人医療における
チーム的アプローチをめざして」と
いうテーマで第二回めを開催し、老
人病院の果たす役割とその必要性に
ついての各界のコンセンサスを得る
ことに成功しました。
さらに、医療を取り巻く情勢、行
政サイドの動行をいち早くキャッチ、
それらの分析を兼ねた各種の報告会、
老人医療に携わる者の教育・研修会
等も行い、老人医療、看護の質的向
上、均一化にも務めてきました。

こういった活動に加えて、会員の
方々も、それぞれの立場で、地域に
おける医療活動を通して、地域住民
等の老人医療への理解を深めていく
啓蒙活動を行うとともに、自らの考
え、体験等の発表といった広報活動
しかしながら、未だに医療従事者
の中にも、正しい老人医療への認識
に乏しい人も多く、制度上での老人
病院の位置づけも確立されていると
はいい難い現状でもあります。
したがって、今後、我われが行わ
なければならぬことは、日常の老
人医療の実践活動の中から、さらに
その専門性を追求していくことと、
活動の輪をさらに大きく広げる努力
を行うことでしょう。それが、我国
における老人医療の位置づけ、向上
に寄与していくものと信じています。
その意味において、当会の果たす
べき役割と責任は非常に大きいもの
となるでしょうし、会員全員が身を
引きしめて事に当たると同時に、各
界の諸先生方のご助言、ご指導をい
ただきつつ、さらに努力していきたく
いと考えます。

会員施設訪問

結核療養所として

スタート

当武久病院は、山口県下関市武久町二丁目五十三番八号に所在し、医療法人社団青寿会に属する三八八床の特例許可老人病院です。関連法人施設として隣接地に、社会福祉法人祥寿園に属する特別養護老人ホーム「寿海荘」（一三〇床）および軽費老人ホーム「福海苑」（一〇〇床）があり、また、財団法人「山口老年医学総合研究所」および公益信託「穎原老年病学研究者奨学基金」があります。これ等病院と関連施設の立地条件としては、下関市の中心部から車で約十分位の所で写真でおわकारの通り、海に近い恵まれた所にあります。

ここで病院の沿革についてふれてみますと、昭和三十年八月一日、当時下関市彦島で婦人科を開業しておりました父穎原俊一が、結核療養所として当地に武久病院を開設したことに始まります。当時、低所得者層の間には、未治療のまま放置された結核患者が多数あり、療養施設およびベッドの不足は、かなり深刻であったよう、見かねた父は、当時の

海水浴場娯楽施設を買い取って、三〇床の病院に改修したそうです。当時のエピソードとして、病院は海岸までほんの十メートルの所にあるのですが、当時下関市内では有数の海水浴場であった武久海岸に、サナトリウムを作るということで、ずいぶん茶屋組合その他地元の反対があったようです。最後は「もし武久病院開設後に海水浴客が減ったら病院を閉鎖する」との一札を入れて開院に踏み切ったそうで、たまたまその年は、大変気候が良く、例年にも増して海水浴客が多く、事なきを得たのととでした。



医療法人社団青寿会
武久病院
理事長・院長

穎原 健



「何とかしなければ」が

推進のエネルギーに

さて、開院後は徐々に病床を増床してまいりまして、運営も安定し、一段落ついたと思つた頃には、結核患者が徐々に減少して来て、昭和四十年頃を転機に漸次ねたきり老人の数が増えて来ております。これは一つは自然の流れとして、また一つは意図的に行われたわけですが……。つまり、昭和三十年代の終りから四十年代の初めは、いわゆる急成長時代のきざしとも言いましようか、それに伴う核家族化も急速に具現化して来た頃で、世の中の「弱者」「恵

まれない者」に目を向ける医療従事者には、当然のように「結核の次はねたきり老人だ」と思わせるものがあつたと思われます。

当時、父が良く口に出したエピソードに、「患者の家に往診に行くと、家族は誰もいなくて、ねたきりのおじいちゃんが、ポツンとふとんにねていて、おむつはあてているもの、大小便は、たれ流しの状態で、枕もとに握りめし二つに、やかに水が入れてあつた」これは何とかしなければ！」

この思いが武久病院の歴史の背景であり、推進のエネルギーであつたと思われます。病院の運営は決して楽なはずはなく、開院当初の三〇床から三八八床の現在まで、実に十回に及ぶ増床を行っているのを見て、病院の牛歩の如き発展ぶりがおわかりかと思ひます。

以上が病院の小史であります。昭和五十一年六月一日には特別養護老人ホーム「寿海荘」を、また昭和五十三年四月五日には、軽費老人ホーム「福海苑」を開設し、昭和五十九年三月六日には「財団法人山口老

会員施設訪問

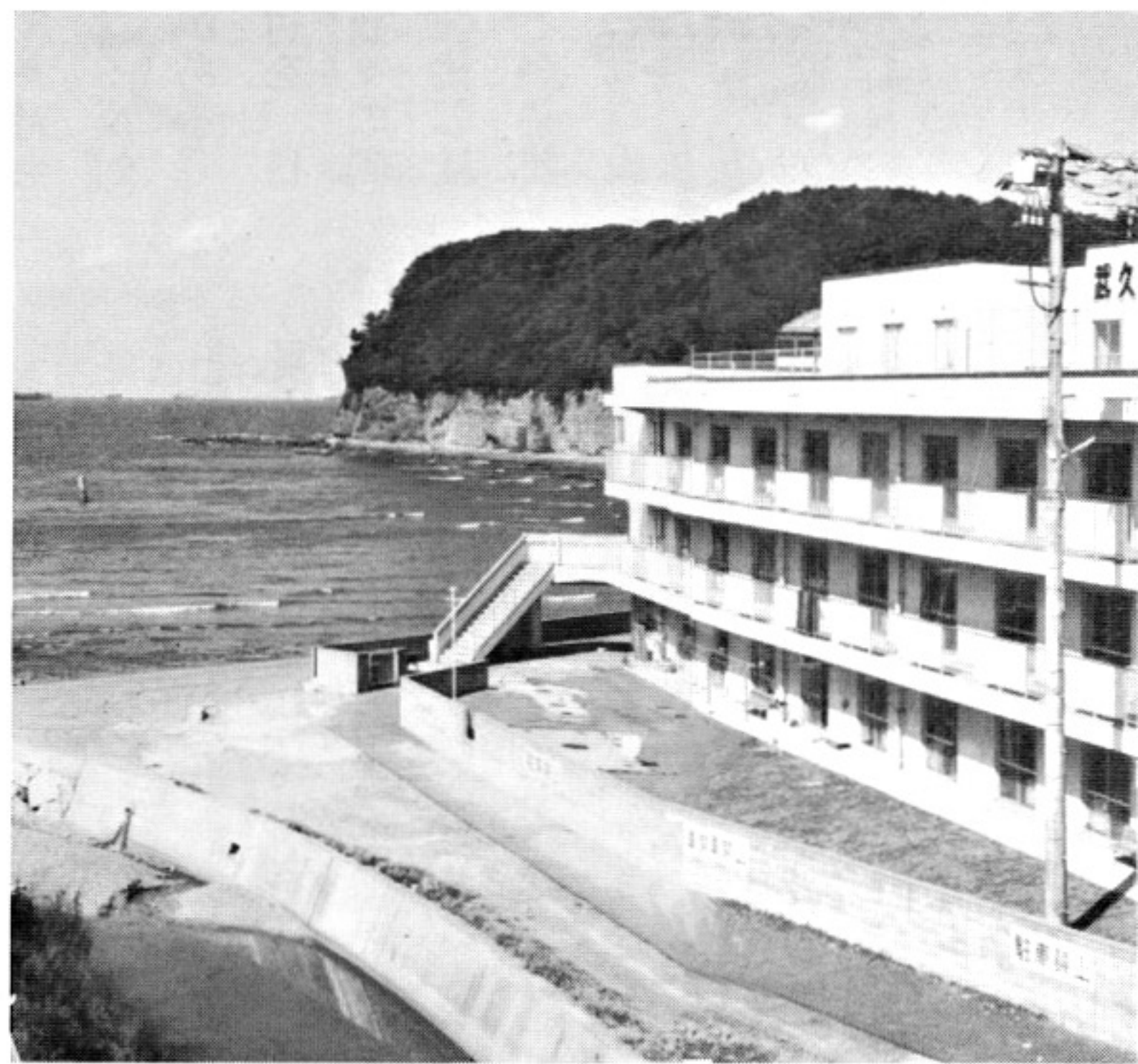
武久病院のスタッフ(上)……… 患者構成(下)

<許可病床… 388床, 総スタッフ数 252名 ○医師…11名, 夜間等非常勤医師10名 ○正看護婦…48名, 准看護婦…60名, 補助看護婦…48名, 学生…16名 ○事務員…12名, ○検査室…4名, ○薬局…3名, ○リハビリ…6名, ○ケースワーカー…2名, ○X線技師…1名 ○給食…17名, ○掃除…8名, ○洗濯…3名 ○警備営繕…3名					
95歳～	4名	70歳～74歳	48名	～49歳	3名
90"～94歳	27名	65"～69"	20"	平均年齢 78歳	
85"～89"	98名	60"～64"	8"	男女比 14:25	
80"～84"	79名	55"～59"	6"		
75"～79"	92名	50"～54"	3"		

年医学総合研究所を、同年三月二十七日には「公益信託頼原老年病学研究者奨学基金」を設立いたしました。研究所での現在のテーマは、地域を限定しての老人の実態調査、および研究部門では脂質分析による動脈硬化の研究や、リンパ球の貪食能による免疫の研究等を行っています。将来的には症例を重ね、老人の各検査値の正常域の設定等の研究や、老人性痴呆の研究も行って見たいと思っています。

会員施設訪問① 武久病院

「良き老人医療」 実現への模索



**充実した
スタッフと施設**
 病院のスタッフは表の通りです。当院は、全棟特例許可病棟ですが、基準看護一類を施行しておりますので、付添等はつけていません。また、全室四人部屋で、差額ベッドの徴収は行っておりません。また、おむつ等を使用している方については、実費として頂いている他は、一切の個人負担は頂いておりません。設備的な特徴としては、全室避難用路を兼ねたバルコニー付であること。リハビリは、施設基準を採っていること。一部A・D・Lの比較的良好な人向け

に、室内水洗トイレの設備があること(一五室)。ねたきりの方のための特殊浴槽があること等があります。次に患者さんの実態ですが、表のようになっています。ねたきりの方が約三〇〇名、そのうち約二〇〇名が、全面介助を要する方です。約九〇名の方が歩行可能ですが、杖その他の補助器具を要する方が七〇名を越えます。おむつを使用している方は、二一〇名ほど。看護レベルで常時監視を要する程度の重症者は、約七〇名位です。注射は急性疾患に対し三〇名位、慢性疾患に対し四〇名位に對して行っております。複雑なリハ

ビリを行っている人三六名、簡単なリハビリを行っている人、一四名、他に点数請求を行っていないが、集団で行うリハビリを受けている人が百三〇名位います。

また、いわゆるボケ老人は、大声で喚いたり、徘徊したりする高度な方が四五名位、軽度、中等度の方が百四〇名位おられます。当院に入院される方は、ほぼ一〇〇パーセント下関在住の開業医か、または、国公立の病院からの紹介で、県内在住の方が殆んどで、そのうち九〇パーセント以上が下関市内の方です。以上、当院の実状をありのまま綴ってみました。

* * * * *

昨今の医療情勢は、正に激動いたしております。薄暗い闇に眼をこらして先を読む慧眼こそ欲するところではあります。元より愚鈍な小生のこと、諸先生のお力を借りて、理想とすべき「良き老人医療」への道を探りたいと思っております。

▽この「会員施設訪問」は会員の皆さまが作るコーナーです。原稿をお寄せ下さい。(事務局)

アンテナ

「老人保健施設」の社会的アピールを

老人の専門医療を考える会事務局長

上川病院副院長

吉岡 充

老人病院の最大関心事のひとつが、老人保健施設の動向である。特に、老人保健施設制度発足後の特例許可病院制度の取り扱いや、老人保健施設療養費の料金体系に強い関心が集まっている。

制度化については、国会解散、同日選挙で、老人保健法改正法案が成立しなかったため、秋の臨時国会で再度検討されることになっている。しかし、臨時国会は、国鉄関連法案で難航が予想され、さらに総裁選と首班指名で国会が空白となるため、今年中に老健法案が成立しないことも考えられる。それゆえ、老人保健施設の制度化とモデル事業の実施については、流動的要素も少なくない。しかし、六月六日に閣議決定された「長寿社会対策大綱」や、大綱決定前の四月八日に厚生省が発表した

「高齢者対策企画推進本部報告」を読むかぎり、老人保健施設制度化に対する政府の意気込みは、かなりのものがある。特に、企画本部報告は、制度化の主張とともに、計画的整備を推進することを明らかにしており、さらに「制度化された後には、その実施状況を踏まえて、高齢者の入所施設体系をさらに検討する」となっている。この報告を読むかぎり、当面老人病院制度は現行のままでも、いずれは老人保健施設制度に包括化されることになるかと予想される。

このことは「老人病院を老人専門病院へ」という、当会の主張と対立することになる。しかし、老人の入院治療ニーズの増大に対して、社会的使命を担う老人病院が単なる反対論を展開することにも問題がある。今後は、老人保健施設の検討を、日常老人医療を実践している我々の側からも行い、当会の団結を強化し社会的にアピールして行くことが必要である。そのうえで、老人保健施設を安上りの「老人収容施設」にしてしまおうとする考え方について反対していきたい。

お知らせ

△老人の専門医療を考える会

第三回全国シンポジウム開催

どうする老人医療

これからの老人病院PARTIII

—老人の専門医療からみた

老人保健施設へのアプローチ

日時 昭和61年7月12日(土)

13時～16時

場所 銀座ガスホール

主催 老人の専門医療を考える会

※詳しくは当会事務局までお問い合わせ下さい。

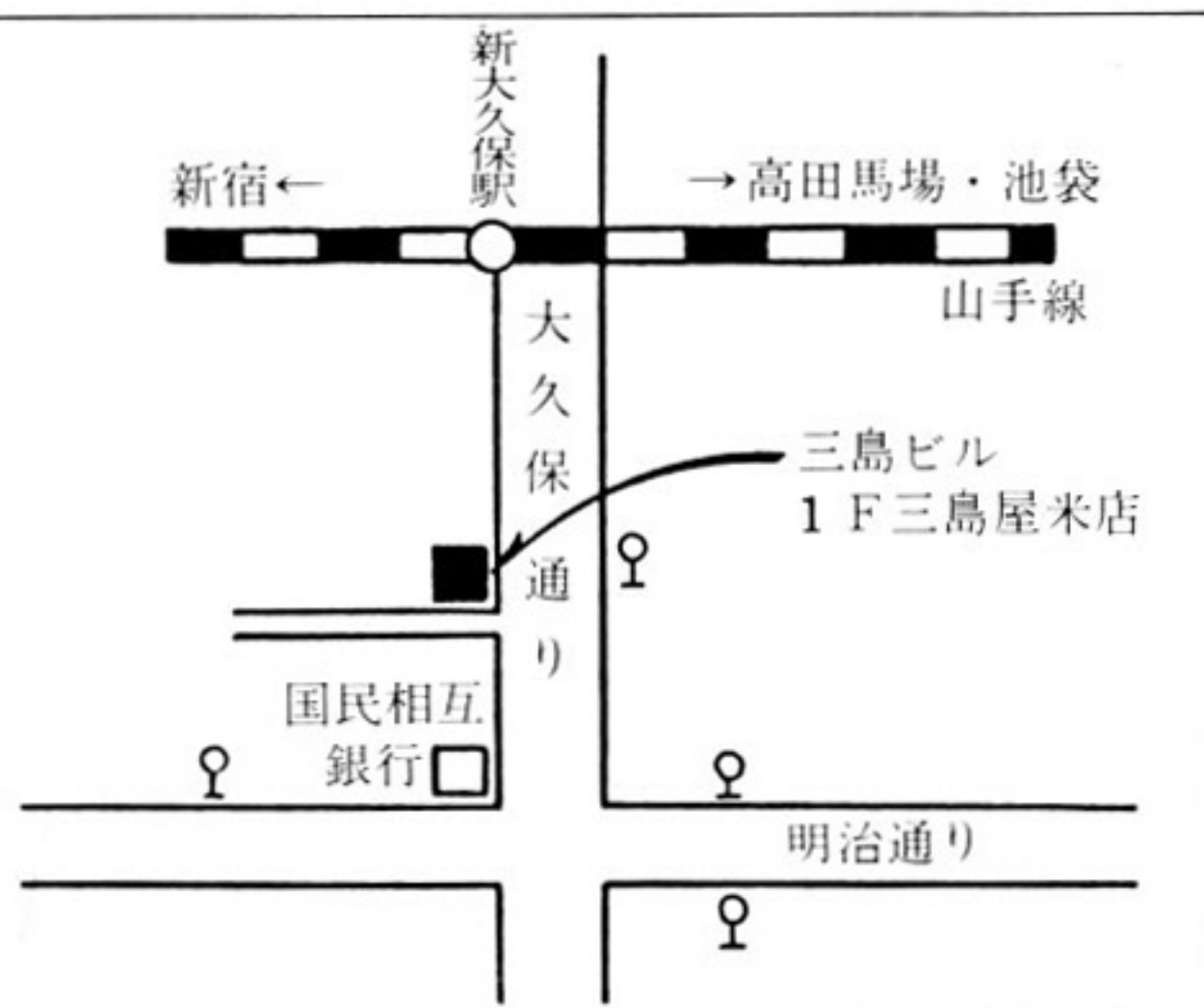
電話 03(232)5926

編集後記

夏本番となりました。先生方も、暑さに負けず、老人医療の現場で頑張っているらしいこととおもいます。事務局では、皆様のお手許にこの創刊号をお届けすることができ、ホッとしております。もう一つうれしいお知らせは、これまで当会では事務局を天本病院内に置かせていただいた

ておりましたが、六月一日より左記において事務所を開設したことです。これからも会員の先生方、老人医療に携わっている皆様方の一層のお力添えをお願いし、老人医療のネットワークの核となるよう全力投球していきたく思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(安芸)



老人の専門医療を考える会

〒160 東京都新宿区大久保一―四

―二〇 三島ビル六〇―

TEL 03(二三二)五九二六

(交通) 国電: 新大久保駅下車徒歩5分

都営バス: 大久保通り下車

徒歩1分